

アメリカの芸術教育に関する諸調査

アメリカの大学にはなぜ音楽学科があるのか？

菅野恵理子

アメリカの大学にはなぜ音楽学科があるのか？

目 次

I. well-cultured musician ～より教養性の高い音楽の学びへ	5
(1) そもそも、音楽は大学の中にあったのか？	5
(2) 音楽はどのように学びの対象になったのか	6
(3) 現在、音楽学科はリベラルアーツの中にどう組み込まれているのか？	8
(4) パフォーマンスとリベラルアーツの歩み寄り	12
(i) 総合大学音楽学科で高まるパフォーマンス重視化	12
(ii) アーティストと組む大学付属の音楽学校	13
(iii) 音楽院で高まるリベラルアーツ教育	15
II. well-socialized musician ～外部社会とつながっていく音楽家	16
(1) 他学部とのつながり 学際的な学びは社会に弾力性を生むか	16
(2) 海外とのつながり 大学・学部間の国際ネットワーク拡大	18
(3) 地域社会とのつながり より長期密着型の地域音楽活動へ	18
(4) 実社会とのつながり 音楽の学びを、より実践的に生かすために	19
(5) グローバル社会とのつながり 音楽を通して世界の現実と向き合う	21
III. 音楽業界を取り巻く新しい動き～未来の音楽家を育てる戦略的プラン	22
(1) アーツ・アントレプレナーシップ・プログラム	22
(2) コミュニティ・アーティスト・プログラム	23
(3) 自主的な音楽活動に対する助成金	23
(4) 現場に即した音楽教育研究の充実	24

取材・文◎菅野恵理子

アメリカの大学にはなぜ音楽学科があるのか？

「音楽」の辞書的定義は一つでも、「音楽」への接し方は人によって様々である。音楽にどのような価値を見出すのか、音楽にどのくらいの距離感で接するのか、音楽をどのようなカリキュラムで学ぶのか、音楽以外にどのような分野の知識や見識を持っているのか、音楽を通してどのように人や社会と繋がるのか……。それによって、各々の「音楽」に関わるコンテキストが存在するはずである。そのコンテキストは、近年ますます多様化しているようだ。それは音楽が文化として広く根づいてきた証ともいえるだろう。今回はその一例として、アメリカの高等教育機関における音楽教育のあり方取材した。

アメリカでは日本と異なり音楽単科大学は少なく、音楽の専門教育は全米各地にある音楽院にて行われている。中でもカーティス音楽院、ジュリアード音楽院、イーストマン音楽院等はトップ校として知られている。一方、総合大学にもほぼ必ずといってよいほど音楽学科あるいは付属の音楽学校がある。たとえば世界大学ランキング（QS World University Lanking 参照）上位校のハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、イェール大学、ペンシルベニア大学など、いずれも音楽学科がある。なぜ総合大学にあるのかと意外に感じる方も多いかもしれない。日本の総合大学では、教養科目の一環で音楽史や音楽理論などの授業が開講されることがあるが、学科として成立している大学は少ない。

なぜアメリカの総合大学には音楽学科があるのか？音楽院とは何が違うのか？音楽は高等教育においてどのような位置付けなのか？音楽学科生をとりまく教育環境と未来像は？

そこでアメリカの大学音楽学科と音楽院双方への取材を通して、未来の音楽家像、人物像をどう捉えて教育しているのかを探ってみた。今回取材させて頂いた総合大学（あるいは関係者へのインタビュー）は以下の通り。各創立年と音楽学科設立年を列記した。これだけで一般化して語ることはできないが、一つの傾向としてご紹介したい。

ハーバード大学	マサチューセッツ州ボストン	1636 年創立	音楽学科 1855 年
イェール大学	コネチカット州ニューヘイブン	1701 年創立	音楽学校 1890 年
ペンシルベニア大学	ペンシルベニア州フィラデルフィア	1755 年創立	音楽学科
ジョーンズ・ホプキンス大学	メリーランド州ボルティモア	1876 年創立	ピーボディ音楽学校 1857 年
マサチューセッツ工科大学	マサチューセッツ州ボストン	1865 年創立	音楽学科 1961 年
カリフォルニア大学	カリフォルニア州サンフランシスコ	1868 年創立	音楽学科 1905 年 (州立・バークレー校)
スタンフォード大学	カリフォルニア州サンフランシスコ	1891 年創立	音楽学科 1947 年
カーティス音楽院	ペンシルベニア州フィラデルフィア	1924 年創立	
ジュリアード音楽院	ニューヨーク州ニューヨーク	1926 年創立 (前身の The Institute of Musical Art は 1905 年)	
バークリー音楽大学	マサチューセッツ州ボストン	1945 年創立	

I. well-cultured musician より教養性の高い

(1) 音楽は、そもそも大学の中にあったのか？

アメリカにおける大学の歴史は約 380 年だが、音楽学科は約 150 年と比較的歴史は浅い。全米最古の高等教育機関であるハーバード大学は 1636 年に創立されているが、音楽学科設立はそれから約 220 年後である。イエール大学音楽学科は創立から約 190 年後、マサチューセッツ工科大音楽学科は創立から約 100 年後、カリフォルニア大学バークレー校音楽学科は創立から約 50 年後、スタンフォード大学音楽学科も約 50 年後である。ではこの期間、音楽教育は全く行なわれていなかったのだろうか？

ハーバード大学は創立当初、教会の礼拝や各カレッジの催し物で聖歌隊が合唱するなど、音楽は確かに存在していた。しかし楽器演奏の機会がなかったため、1808 年に何名かの学生が集まってピエリアン・ソダリティ（協会）と呼ばれる小さな室内楽団をつくり、それが現在のハーバード＝ラドクリフ・オーケストラ（Harvard-Radcliff Orchestra）に発展したそうである。音楽学科はそれから約 50 年後の 1855 年に設立されている。イエール大学では 1890 年に音楽学科が設立されているが、すでに 1855 年から大学内において教会音楽と聖歌隊への合唱指導などが行われていた。またスタンフォード大学の音楽学科設立は 1947 年であるが、1891 年大学創立当初よりキャンパス内礼拝堂で教会音楽の演奏が行われていた。これは創始者ジェーン・スタンフォード女史の遺志でもある。

大学によって違いはあるが、3 校とも創立時から教会で音楽活動が行われていた。それと音楽学科設立との因果関係を証明できるものはないが、教会音楽を始め、学内で行われる公的・私的な演奏活動が音楽学科設立に少なからず寄与したと推察される。

かつては職業訓練学校とも言われたマサチューセッツ工科大学（MIT）でも、人文・社会科学の重要性が 1865 年大学創立当初から提唱され、ようやく 1930 年代に人文学部が創立



全米最古にして最高学府のハーバード大学は、ニューイングランドのケンブリッジという地区にある。



スタンフォード大学には中世の建築様式を模した校舎がある。内部は wifi 完備。



スタンフォード大学構内にある教会は、創始者ジェーン女史がイタリアに何度も足を運び、ルネサンス時代の教会を忠実に再現したものだろう。カリフォルニア大バークレー校では音楽学科創設時からコーラスの授業があった。



カリフォルニア大バークレー校では音楽学科創設時からコーラスの授業があった。

された。ただその頃はまだ音楽、哲学、心理学、法学、文学、芸術等はカリキュラム外としてみなされており、1950年代から60年代にかけて段階的に学科設置に至る。1980年代後半からは芸術科目が増え、2000年代には「人文学・社会科学」学部から、「人文学・芸術・社会科学」学部へと名称変更されている。近年になって、芸術重視傾向が加速してきた印象を受ける。(MITでの「芸術」は建築の割合が多いそうだが、この文言を学部名に入れることで意識の変化が伺える)

<http://shass.mit.edu/inside/history>



アジアからの留学生も多いマサチューセッツ工科大学 (MIT)。構内を歩いていると、ふとピアノの音色が聞こえてきた。

ここに挙げたのはほんの一例だが、大学創立から音楽学科設置までの期間が次第に短くなっている。これは高等教育の中で人文学の重要性、そして音楽・芸術の必然性が認められてきた結果か、あるいは最古かつ最高学府であるハーバード大学の前例にならったのか。いずれにせよ、音楽・芸術の存在価値は高まっているといえる。

(2) 音楽はどのように学ぶ対象になったのか？

では公的な音楽学科設置に至るには、どのような動機と目的があったのか。そして音楽はどのように「学び」の対象になったのだろうか。



フィラデルフィアの独立記念館。アメリカ独立宣言はここで起草・署名された。

ここで少しアメリカ建国時の歴史を紐解いてみたい。アメリカは16世紀コロンブスによって新大陸として発見され、1620年代よりヨーロッパからの移民が入植を始めた。今でも東海岸各州にはヨーロッパのような街並みが残っているが、ヨーロッパから建築技術だけでなく文化や精神性を持ち込み、それが建国の礎となっていたことが伺える。米国最古の学府ハーバード大学は、米国最古の地域ニューイングランドで1636年に創立され、早々に神学部も設立されているが、これはひとつの象徴といえるだろう。構内には教会が建てられ、礼拝や教会音楽の演奏が行われた。それから音楽学科が成立するまで約220年もの年月を擁しているが、教会音楽活動から始まり、私的な室内楽団編成などを経て、やがて公的に音楽教育が施されるようになってきたのである。つまり、音楽学科設立の布石は創立時からあったのだ。

音楽が学問として客観的かつ体系的に学ばれるようになったとすれば、それは文化の成長期を迎えた証とも言えるだろう。1855年以降、ハーバード大学を皮切りに音楽学科設立が相次いでいるが、折しもニューヨーク世界万博開催、ニューヨーク・スタインウェイ社が創立された時期（共に1853年）とも重なる。「音楽を学ぶ」「音楽で生活を豊かにする」という文化思

潮が定着してきた兆しと言えるかもしれない。アメリカ大陸入植から約 230 年、アメリカ合衆国独立（1776 年）から約 80 年が経過し、文化活動啓蒙の機運が高まっていたとみられる。

では「音楽を学ぶ」とはどういうことだろうか？その定義とは？

教養人としての人格形成を目指す高等教育の源流は中世～ルネサンス期にある。それを恐らく一部の大学がモデルにしたであろうことが、いくつか象徴的な形で現れている。例えばスタンフォード大学のキャンパス中心部にある校舎や礼拝堂は、中世の建築様式を模倣している。また同大創立時（1891 年）に設立された学部は、化学、英語、ドイツ語、ギリシャ語、ラテン語、ロマンス語、文学、歴史、数学、哲学（倫理）、物理、政治科学、心理学であり、まさに教養科目が並ぶ。

イエール大学には中世・ルネサンス期の文献やヨーロッパの珍しい古文書等を収めた図書館がある。筆者が訪れた時、シェイクスピアのアメリカにおける受容の歴史を辿った「Remembering Shakespeare」展も行われていた。またアメリカの大学や美術館には歴史資料・音源や古楽器コレクションが多い。ボストン美術館、ハーバード大学、イエール大学等にも古楽器コレクションが存在する。実際 19 世紀のアメリカでは、古楽はそれ以降の音楽と同等の価値を持って受け入れられたようだ。

『『古楽』に対する姿勢がヨーロッパとアメリカではほとんど正反対といってよいほどに違っているということである。19 世紀的な伝統にあまり「汚染」されていないこの新大陸の人々は古楽のもたらす新しい響きを抵抗なく受け入れたばかりか、むしろ熱狂的に楽しんだのである。そしてヨーロッパではアウトローにすぎなかったこの『古楽復興』がアメリカでは商業ベースによって広く普及したのであった。マーラーの『ダイジェスト版』バッハがアメリカで頻繁に演奏されたという事実はこのような背景なくしては考えられない」（渡辺裕著『文化史の中のマーラー』より抜粋）。

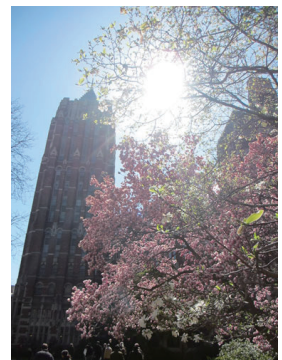
19 世紀半ばにおいて音楽を学ぶ対象とした時、中世の高等教



ボストン美術館の古楽器コレクション。16 世紀ナポリで製作されたハーpsiコード等が展示されている。



カリフォルニア大学バークリー校は、小高い丘一面がキャンパスである。



アカデミックで落ち着いた雰囲気
のイエール大学。



バイネキ稀観本図書館（Beinecke Rare Book and Manuscript Library）。モダンなインテリアと古書の組み合わせが印象的である。

育の在り方にその原点を見出したとを考えても不思議ではない。では大学機関が初めてヨーロッパで創設された時（最古は 13 世紀に大学認定を受けたボローニャ大学）、音楽はどのような位置付けで学ばれていたのか。最古の教育機関はスコラ・カントルムで、その流れを広めたのはフランク王国カール大帝（768～814）、そして大帝が招いた学者が高等教育の基礎、つまり教養学を作ったと言われる。それが典礼聖歌を学ぶことと、自由学芸（リベラルアーツ）を学ぶことであった。リベラルアーツとは自由七科とも呼ばれ、言語に関わる三科目（文法・修辭学・弁証法）と数学に関わる四科目（算術・幾何・天文・音楽）があり、音楽は後者に属していた。音楽は幾何や天文学と同じく数の論理で説明されるもので、古代ギリシャ思想を源流とした、キリスト教的世界の調和を象徴していた。さらにこの思想を踏まえたボエティウスの理論書『音楽教程』が流布し、修道院や教会付属学校で教えられていた。中世の大学においてはこの自由七科の要素を引き継いだ教養学が教えられており、音楽の授業では専らこの理論書が使われていたようだ。（金澤正剛著『中世音楽の精神史』参照）

現在の大学音楽学科における「音楽」の位置付けを見ると、少なからずこうしたリベラルアーツの考え方が反映されている。教会やプライベートな演奏活動のみにとどまらず、学問として公に学ばれるようになったのはごく自然な流れだろう。そしてそれは、専門家養成というより人格形成上の基礎教養としてである。だがボエティウスの著書によって理論優位だった時代とは異なり、現在はカリキュラム配分こそ違いますが、理論と実践を組み合わせた総合的な音楽教育を行う場となっている。それは次項で述べたい。

(3) 現在、音楽学科はリベラルアーツの中にどう組み込まれているのか？ ～理論や音楽学のみならず、パフォーマンスの機会も多数



カリフォルニア大バークレー校の広場。奥にある東アジア図書館には日本の書物や古書も六千冊ほど所蔵されている。また同大コンサートホールでは一流アーティストの演奏会が連日のように行われている。

では現在、音楽はリベラルアーツの中にどう組み込まれているのだろうか。また音楽学科生は主専攻以外に、どのような教養科目を履修しているのだろうか？ここではカリフォルニア大学（州立）、ペンシルベニア大学、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学の例をご紹介したい。大学によって「教養科目」の対象範囲が異なり、それによって音楽の位置付けにも少なからず違いが生まれている。

1905 年に音楽学科が設置されたカリフォルニア大学（ここでは全てバークレー校、以下省略）はリベラルアーツ大学としての性格が強い。カリフォルニア州の方針により学際科目が多く、一つの根拠として「リベラルアーツ教育は学生の精神を広く開放し、自分では知りえなかった点と点を結び、自分の専攻分野をより広い文脈の中で捉えることができるようになる」

と提唱している（大学公式サイトより）。

現在約 17,000 名が在籍し、同大最大規模を誇る人文科学部（College of Letters and Sciences）は「人文学」「生物科学」「数学・自然科学」「社会科学」「学際科目など」の 5 部門を持つ。音楽学科は「人文学」部門に属し、同部門には音楽史、音楽演習、演劇、映画、修辞学、哲学など 17 の表現芸術科目がある。

音楽学科の学生は、まず全学生必修科目としてカリフォルニア大学全学共通科目「ライティング基礎」「アメリカの歴史」、次にパークレー校共通科目「アメリカ文化研究」、人文科学部必修科目「読解と作文」「数量分析」「外国語」「選択必修 7 科目（人文学／生物科学／歴史学／国際研究／哲学／自然科学／社会・行動科学）」、さらに音楽学科必修科目（アンサンブル 3 科目等）なども加え、合計 120 単位となる。授与される学位は Bachelor of Arts in Music 「学士号（音楽）」であるが、これは人文科学の中での音楽という意味であり、音楽学校や音楽院で授与される Bachelor of Music 「音楽学士号」とは区別される。音楽民族学教授ボニー・ウェイド教授は「この大学では、音楽学科はリベラルアーツの中に存在しています。例えば音楽民族学は社会科学と人文学の組み合わせであり、文化研究の一つであると考えています。私自身はボストン大学で音楽学士号（Bachelor of music）を取得しましたが、リベラルアーツ科目は 4 年間で 1 教科だけでした。もしリベラルアーツを学んでいれば、人生設計を考える上でどれだけ違っただろうかと思います。今でも学生の中にはリベラルアーツがどれだけ重要なのか、あるいは音楽の背景に哲学があることを十分に理解していない学生も多いので、彼らに興味を持たせることが私の使命だと思っています」と語る。



カリフォルニア大学パークレー校でアジアの音楽民族学を教えるボニー・ウェイド教授。来日経験も多数。「日本の皆さんはプロ・アマ問わず、音楽にかける情熱が素晴らしいと思います」。

アイビー・リーグの一つ、ペンシルベニア大学の音楽学科も人文科学部（School of Arts and Science）に属する。大学創立当時 18 世紀のヨーロッパやアメリカの植民地では、高等教育機関といえば聖職者育成が主であったが、同大創立者ベンジャミン・フランクリン（政治家）はより社会での実用性・汎用性の高い学問を学ばせるための大学設立をめざした。授業で使う言語もギリシャ語・ラテン語ではなく英語とし、教科も自然科学、地質学、地学、現代言語などとした。そのよ



ペンシルベニア大学創立者でもあるベンジャミン・フランクリン像

うな歴史的背景を踏まえてか、現在教養科目の中には科学的・分析的思考力を鍛える要素が強い。まず全学生必修科目として、コミュニケーションに関わる「ライティング」「外国語」、統計分析に関わる「データ数量分析」「分析と証明」、知覚に関わる「異文化分析」「米国における文化的多様性（2012 年度～）」、次に選択必修 7 科目（社会／歴史・伝統／芸術・文学／人文学・社会科学／自然界／物理／自然科学・数学）を履修する。そして音楽主専攻科目は、(1)

理論「音楽理論とミュージシャンシップ」、音楽主専攻必修科目「ヨーロッパの音楽」「アメリカの音楽生活」「音楽民族学」各入門編、(2)「歴史」「音楽民族学」「理論と作曲」、(3)「音楽史セミナー」「音楽民族学セミナー」「理論と作曲セミナー」(いずれか2つのセミナー必修)、以上3段階で構成される。理論学習の対象となるのはクラシック音楽、アメリカ音楽、ワールドミュージックまで幅広く、パフォーマンスの機会も多く設けられている。



「人文科学部は音楽学科に対して積極的に支援してくれています」というマイケル・ケトナー氏。

演奏部門ディレクターのマイケル・ケトナー氏は「音楽を専門にするかどうかが決まっていない場合、あるいは他の分野にも興味がある場合は、大学の音楽学科という選択もよいと思います。これは私の個人的な意見ですが、演奏技術では音楽院の方が上回るかもしれませんが、ここでは深い音楽解釈とその実践法を学ぶ機会になるのではないかと思います。それがパフォーマンスがリベラルアーツに組み込まれている利点でしょう。音楽を学ぶうちに興味を惹かれるものと出会い、それを専門分野とつなげて新しいものを創造する可能性すらあるのです」。

「教養」の定義をさらに幅広く解釈しているのはスタンフォード大学で、21世紀という時代性を鋭く捉えた戦略的なカリキュラムを編成している。ヤシの木が生い茂る緑豊かなキャンパスは新宿よりも広く、どこに行くにもバスや車が必要なほどだ。この音楽学科も人文科学部 (School of Humanities and Sciences) に属する。卒業必要単位は、全学生必修・選択必修科目 (ライティング・修辞学／一般教養科目／言語) と主専攻科目の合計で180単位～、授与学位は「文学士 (音楽)」である。一般教養科目は、「人文学入門」「選択必修5科目 (工学・応用科学／人文学／数学／自然科学／社会科学)」「市民教育 (倫理／グローバルコミュニティ／アメリカ文化研究／ジェンダー研究)」からなる。ちなみにこの市民教育とは、「グローバル市民」の育成と捉えられる。

音楽主専攻科目は (1) 理論、(2) 音楽史、(3) アナリーゼ、(4) ライティング (中世・ルネサンス～現代の音楽研究／西海岸の音楽民族史／シェイクスピアの音楽／録音の歴史／心理物理学と音楽認知／アフリカン・アメリカ音楽の精神史、等から3科目)、(5) 応用科目 (器楽独奏、室内楽演習)。そして特別専攻は5つの分野から選べる (演奏実技／指揮／作曲／歴史と理論／音楽・科学・テクノロジー)。

音楽学科長で合唱団指揮者のスティーブ・サノ教授によれば、「最も人気が高いのはパフォー



スタンフォード大学の広大なキャンパスの一角にあるブラウン音楽センター。音楽学科生は24時間ピアノの練習が可能。音楽学科生含め、99%の学生がキャンパス内学生寮に住んでいる。夜中3時くらいまでどこも電気が煌々とついているらしい。「適度に遊びながら努力も惜しまない、それを "Duck Syndrome" と言うんですよ」(サノ教授談)。



スタンフォード大学音楽学科長のスティーブ・サノ教授。ハワイアン音楽にも精通している。

マンス、続いて音楽・科学・テクノロジーです。特に後者は伝統があります。大学構内にはコンピュータ音楽研究施設（CCRMA）があるのですが、初代館長はヤマハのシンセサイザーに内臓されている FM chips の開発者なんですよ。学生たちは皆起業家精神に富んでいて、音楽学科の学生も自立心旺盛ですね」。同大には極めて充実した助成金制度があるが、芸術・音楽学科生を対象にした助成金もある。自立の第一歩は、何かに自発的にチャレンジするところから始まるのかもしれない。これについては第 4 回目で触れる。

ちなみにスタンフォード大学といえば 2005 年度故スティーブ・ジョブズ氏が卒業式で行った歴史的スピーチが有名だが（→映像）、サノ教授が指導する合唱団がそのステージを飾ったそうである。音楽学科卒業生の一例として、作曲専攻のクリストファー・ティン氏はスタンフォードで学士号取得後、英国王立音楽大学で修士号を取得し、現在はビデオゲームや映画音楽の作曲を手掛け、2011 年には 2 つのグラミー賞に輝いたそうだ。

なお大学院では文学修士（音楽）、哲学博士（音楽）を授与している。ちなみに 1997 年ヴァン・クライバーン国際コンクール優勝のジョン・ナカマツ氏は同大卒業生である（ドイツ研究・教育）。

<http://humsci.stanford.edu/departments/visit/music>



マサチューセッツ工科大学キャンパス内では楽器をもった学生たちがちらほら。正面玄関前でも演奏が始まった！

一方、マサチューセッツ工科大学の音楽プログラムも人文科学・芸術学部には属するが、あくまで重心を科学におきながら音楽を組み込んでいくプログラムだ。授与学位は「科学学士（音楽）」である。音楽主専攻生の卒業要件は、科学必修科目（科学／人文・芸術・社会科学／科学テクノロジー／ラボ研究／コミュニケーション関連、以上 17 単位）、音楽必修科目（音楽史（古楽～コンテンポラリー）／和声と対位法／調性音楽の書法、またはアナリーゼ／演奏実技／音楽セミナー、以上 84 単位）、音楽選択必修科目（作曲・理論／ワールドミュージック／理論・作曲、音楽史・文学、演奏実技から 1 つ選択、

以上 36 単位）、自由選択科目（音楽、あるいは他分野から 60 単位）、合計 180 単位以上である。

※ジョイントメジャーとして「科学学士（人文学と工学）」、「科学学士（人文学と科学）」も授与している。

なお上記科目のほとんどはアンサンブル実技等のパフォーマンスも含め、教養科目として全学生対象に開講されている。まさに、音楽はリベラルアーツの一環なのである。では音楽理論や音楽史だけでなく、パフォーマンスを含むことにどんな意味があるのだろうか？ペンシルベニア大学マイケル・ケトナー氏によれば「創立者ベンジャミン・フランクリンは、『学校とは思想を生み出すだけでなく、それを実践する場である』と述べていますが、音楽も実践されるべきということではないでしょうか」と言う。つまり理論と実践の両方がよい按配で組み合わせられるのが理想、ということである。これは一見当然のように聞こえるが、意外と実現させるのは難しい。カリキュラムの変遷を見ても分かる通り、「音楽を学ぶ」ことの定義は時代によって変化しているのだ。そして今また、各々の立場から見直されてきているようである。

(4) パフォーマンスとリベラルアーツの歩み寄り

前述したように総合大学では、パフォーマンスを含む授業が多数開講されている。では専門教育を行う音楽院ではどうなのか？今回、総合大学音楽学科と音楽院のカリキュラムを対比してみたところ、一つの兆候が見えてきた。それは、総合大学音楽学科ではパフォーマンスの重視化、音楽院ではリベラルアーツ重視化の動きがあるようだ。以下、大学音楽学科（Music Department）、大学付属の音楽学校（School of music）、音楽院（Conservatory）に分類して述べる。

※呼称は、教育機関の規模、組織体系、授与学位などによって異なる。

(i) 総合大学音楽学科で高まるパフォーマンス重視化

大学音楽学科におけるパフォーマンス重視化に関する大きな流れとして、全学生を対象としたアンサンブル科目開講・対象楽器の増加、また楽器個人レッスンへの奨学金授与、個人レッスンの単位化が挙げられる。ここではカリフォルニア大学、スタンフォード大学、ペンシルベニア大学、マサチューセッツ工科大学、そして音楽院との提携学位プログラムがあるハーバード大学のカリキュラムを取り上げる。



クラシック音楽のみならず、ガムランやアフリカダンス等の授業もある。もちろんパフォーマンスの機会も多数。

カリフォルニア大学では音楽学科が設置された 1905 年当初は、オーケストラ、合唱、和声と対位法のクラスが開講されていた。その頃から学生が毎週のように地域コンサートを行っていることから、理論だけでなくパフォーマンスの教育も行われていたと考えられる。音楽民族学教授ボニー・ウェイド教授によれば、1910 年代から音楽史、その後に音楽学、音楽民族学、またミュージシャンシップ・ソルフェージュ・聴音などの授業が増えてきたそうだ。これはパフォーマンスがより重視化されてきた兆しと考えられるだろう。

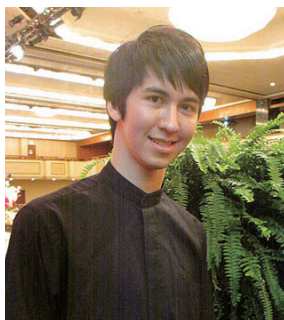
現在全学生を対象としたアンサンブル実技の授業が多数開講されており、コンテンポラリー即興アンサンブル、ゴスペル合唱、バロック・アンサンブル、コーラス、シンフォニー、吹奏楽、ジャワ・ガムラン、アフリカ音楽アンサンブル等がある。ウェイド教授は、「楽器を演奏することによって、すんなりとその音楽に入り込むことができます。音楽を通じて自分の国、他の国を知ることはいいことです」と語る。パフォーマンスの意義とは、演奏を通じて、その音楽がもつ文化的背景を身体で体験することに他ならない。

ペンシルベニア大学でもアンサンブル実技は全学生対象に開講されており、単位取得が可能である（吹奏楽、管弦楽団、バロック&リコーダー室内楽団、室内楽団、合唱団、聖歌隊、ジャズ、アラブ・アンサンブル、サンバアンサンブル等。要オーディション）。その他にも器楽と声楽の実技指導特別プログラムが用意されている（マリアン・アンダーソン女史からの寄付金）。また "College House Music Program" では各楽器の個人レッスンが受けられ、現在約 220 人が

受講している。さらに音楽主専攻の学生には "Music 10 Program" という特別プログラムがあり、こちらは地元フィラデルフィア管弦楽団奏者などが指導にあたることもある。これまでこうした個人レッスンはカリキュラム外であったが、最近パフォーマンスの比重を増やすように方針が変更され、2008 年秋から個人レッスンは単位化されている。

マサチューセッツ工科大学では、音楽主専攻生が履修する選択必修科目に「演奏実技」「理論・作曲」「歴史・文学」があるが、「演奏実技」では下記アンサンブルから 1 つを選択する（聖歌隊／室内合唱団／MIT シンフォニーオーケストラ／吹奏楽／祝祭ジャズアンサンブル／室内楽ソサエティ／バリ・ガムラン／セネガル太鼓アンサンブル。要オーディション）。現在音楽科目履修生は 2,000 名、うち 500 名がパフォーマンスの授業を受講している。より集中的に指導を受けたい学生は、エマーソン奨学金で個人レッスンが受講できる。さらにアドバンスレベルと認定された学生はエマーソン・フェローシップにより個人レッスンは単位化される。

スタンフォード大学音楽学科も、全学生対象にアンサンブル科目が開講されている。オーケストラ・室内楽・合唱・太鼓アンサンブルなどの科目があるが、音楽学科では年間 150 以上のコンサートが開催されることから、パフォーマンスは主要な要素といえる。現在音楽科目履修生は 1,000 名以上、音楽主専攻は約 50 名（うち 3 分の 1 がダブルメジャー）である。現在キャンパス内には新しいコンサートホール（844 席）が建設中で、2013 年 1 月に完成予定である。この事業は「未来のリーダーシップ養成プロジェクト」（2006 年～）一環で実施されていることから、音楽や芸術の存在感は今後さらに増すとみられる。



ハーバード＝ニューイングランド音楽院学位提携プログラムで学ぶオルブライトさん（2012 MTNA National Conference にて）。

ハーバード大学では 2005 年より、近隣のニューイングランド音楽院と連携した学位プログラムを展開している。ハーバード大学 4 年間で任意の学位を取得し、その間ニューイングランド音楽院で個人レッスン等を受けながら、5 年目に同音楽院でパフォーマンスの修士号を取得するという計 5 年間のプログラムである。今回、同プログラムで学ぶ現役学生の演奏を聴く機会を得た。ハーバード大学で経済学を学び、ニューイングランド音楽院にも通う学生だ（チャーリー・オルブライトさん）。2006 年ニューヨーク国際ピアノコンクールで優勝した才能を持ち、ピアノの演奏も繊細な表現力とリズム感が光る。こうした二刀流の人材が増えてきている。

(ii) アーティストと組む大学付属の音楽学校 ～リベラルアーツとパフォーマンスの狭間で

一方、音楽学科に比べて規模が大きく独立性が高いとされる音楽学校（School of music）はどうだろうか。例えばロチェスター大学イーストマン音楽学校（1921 年創設）、ジョンズ・ホプキンス大学ピーボディ音楽院などは、カリキュラムや教授陣が音楽院に近い。

ジョンズ・ホプキンス大学ピーボディ音楽院では「音楽学士号 (Bachelor of Music)」、修士号、博士号を授与する。音楽学士号の内訳は演奏、ジャズ演奏、作曲、コンピュータ音楽、録音技能、音楽教育である。学位取得に要する単位は 122 単位+アンサンブル。アンサンブルは全学生に開講され、音楽主専攻の場合には大規模なアンサンブルへの参加が必須となる。また音楽理論、聴音、初見、鍵盤楽器演習、音楽学 (音楽史 I ~ IV) などの音楽関連必修科目のほか、リベラルアーツ科目が開講されている。リベラルアーツは思考の形成や収斂を目的とし、学際的要素が強く、特にライティングが重視されているようだ。

しかし何と言っても音楽院並みの教育環境が同校の特徴であり、著名アーティストを招聘してのマスタークラスやコンサートも多く開かれる。今年 3 月にはピアニスト兼指揮者マレイ・ペライアのマスタークラスが開催された。

イエール大学の場合には音楽学科と音楽学校がある。音楽学科では音楽史、理論、作曲、演奏などが初歩から学ぶことができ、リベラルアーツの学位が取得できる。さらに演奏実技や作曲を高い水準で集中的に学びたい学生は、4 年次から修士課程に相当するイエール音楽学校で学ぶことができる。音楽主専攻の是非に関わらず、一定数の指定科目を履修すれば 1 年間マスタープログラムを履修する資格が得られる (要オーディション)。音楽学校は実技と知識を兼ね備えた社会に役立つ音楽家を育てることを目的とし、過去にはマリン・オルソープ (ボルティモア交響楽団音楽監督・指揮者) 等を輩出している。授与学位は音楽学士号、音楽修士号・博士号などである。

音楽学校では世界的に著名なアーティストとのコラボレーションやマスタークラス等が頻繁に行われ、今年 3 月には作曲家スティーブ・ライヒ臨席のもとで作品演奏が行われ、作曲科学生の作品も同時に披露された。2 月にはイエール・フィッシャー・ハーモニアがウィリアム・クリスティー指揮でカーネギー公演を果たしている。また先日は東京ストリング・クワルテット (イエール大のカルテット・イン・レジデンス) がここで現役引退を発表したのも記憶に新しい。オンライン図書館や資料・音源も充実しており、中でもギルモア図書館はスコア 10 万冊、音楽関連書籍 7 万冊ほか、また音源資料もクラシック音楽からジャズ、演劇、文学、歴史に至るまで 25 万点以上を所蔵している。上記はほんの一例であるが、大学内の音楽学校は、音楽とほぼ同等の教育環境を有していると考えてよいだろう。



ピーボディ音楽学校付近には、ジョンズ・ホプキンス大学メディカルスクール等が点在する。



イエール大学のコンサートホール。毎日のようにコンサートやリサイタルが行われている。

(iii) 音楽院で高まるリベラルアーツ教育

一方、音楽専門教育を行う音楽院では、リベラルアーツの需要が高まってきている。ジュリアード音楽院ではコロンビア大学と提携し、リベラルアーツ科目の単位が取得できる。また優秀な演奏家を多数輩出しているカーティス音楽院（フィラデルフィア）では履修単位数が、パフォーマンス 51 単位、ミュージカル・スタディ 51 単位、リベラルアーツが 30 単位となっている。演奏実技が多いのは当然であるが、リベラルアーツ 30 単位（美学・哲学／芸術史／第二外国語（英語）／英語・英文学／歴史／人文学／言語学／科学）は決して少ない分量ではない。

今回、同音楽院副学長ジョン・マンガン氏にお話を伺いました。

「音楽院なのでやはりパフォーマンス（オーケストラ、室内楽、ソロ、作曲等）がカリキュラムの主要な部分を占めています。ただそれだけでなく『アーティストの人格を形成すること』というのがモットーであり、音楽史・音楽理論・ソルフージュ、ハーモニー等の音楽科目以外にも、リベラルアーツの学びを広げてほしいと考えています。他の音楽院と比べると、少し多いかもしれませんがね。音楽学士号（Bachelor of Music）を取得するためには、例えばシェイクスピアやローマ史、中国史、日本史、文学、哲学、心理学・・・といった勉強が必要になります。こうしたリベラルアーツは演奏家としての芸術性を高め、思想を深めてくれます。これまで受け継がれてきた偉大な歴史遺産の解釈者となり、想像力を働かせてそれを新しい方向へ導くこと、それが "artists who has something to say" なのです」。



バークリー音楽大学のキャンパスはボストン中心部に点在する。新しい学生寮も建設中である。



カーティス音楽院は全学生数 160 名余りのアットホームな校風である。毎週水曜日にはロビーでティーセレモニーが開かれ、なんと教員が生徒やスタッフのために紅茶を淹れる。これは創立時からの伝統だそう。建物は広場に面した角地にあり、左に進んでいくと、最近建てられたばかりの立派な学生寮がある。



カーティス音楽院副学長のマンガン教授。

リベラルアーツのカリキュラム自体はこの 10 年間はほぼ変わっていないそう。しかし 30 ～ 50 年前はまだ授業で扱われていなかった。1960 年代後半から 1970 年代にかけてミュージック・スタディ、その少し後からリベラルアーツが科目として加わるようになった。楽曲解釈を深めて演奏に反映させるには、思考や思想形成が重要であるとの認識が定着した証だろう。

またバークリー音楽大学（ボストン）では音楽学士号取得に要する単位は、和声や聴音、アンサンブルなどのミュージック・スタディ 40 単位に対して、リベラルアーツ 40 単位と比

重が高い。さらに 30 単位が主専攻科目にあてられる。リベラルアーツ必修科目は、芸術史／英語／歴史／人文学／数学・自然科学／音楽史／音楽と社会／社会科学／テクノロジーリテラシー／その他選択科目／である。この大学はキャリア形成重視教育で知られるが、例えば音楽ビジネス主専攻の場合は、リベラルアーツ必修科目にデータ処理・統計学や国際経済学等が加わる。また最近新設された主専攻科目には国際ビジネスライセンス（ストーリーミングサービス、ダウンロード、TV、映画、ゲーム等）と、デジタルマーケティングがある。そして近年ではアントレプレナーシップ（起業家精神）の育成に注力しているようだ。

自立した一音楽家としてどのような知識やスキルが必要なのか、そこから逆算してカリキュラムが構築されている。だからこそ、演奏実技以外のミュージック・スタディとリベラルアーツが 1 対 1 の割合というのは興味深い。



音楽ビジネス学科長のドナルド・ゴードン教授。

II. well-socialized musician ～外部社会とつながっていく音楽家

理論と実践の統合された音楽家、あるいは、音楽能力と基礎教養を併せもつ社会人、という未来像。こうした未来像に向けて、各大学音楽学科や音楽院ではカリキュラムを組んでいることが分かった。では大学内部の動きが見えたところで、外部に対してどのような働きかけがなされているのかを検証してみたい。これは各校が目指す「音楽家の社会的役割」が少なからずプログラムに反映されているはずである。実際に取材を進める中で、ある共通傾向が見えてきた。それを 5 つの視点から述べる。



ピーボディ音楽院内の歴史ある図書館。

(1) 他学部との繋がり

～学際的な学びは社会に弾力性を生むか

総合大学ならではのカリキュラムに、学際科目・学際的研究がある。これは学科・学部といった枠組みを超え、新しい視点で事象を学ぶことを可能にする。例えばカリフォルニア州では、州の方針により大学での学際連携が進んでいるそうだ。



ピーボディ音楽院で行われた音楽院&薬学部共催のレクチャー

学際研究の一例をご紹介します。今年 3 月ピーボディ音楽院において、音楽学科と薬学部が

提携し "Sound, Music and Hearing; A Journey from the Ears to the Brain" というレクチャーが行われた（ピーボディ音楽院は、医学校や生科学などで知られるジョンズ・ホプキンス大学付属）。「音楽は世界言語である」の脳科学的見地からの検証、即興演奏の効用などを科学的に解き明かす内容で、聴衆は音楽関係者以外にも集まったようである。今回講師を務めたのは耳鼻咽喉科の准教授。かつては進路選択の際に音楽か科学かで迷い、趣味で音楽を続けることを選んだそうである。二つの分野に精通している立場ならではの切り口であった。

また二つの分野をまたぐという点において、ダブル・メジャー制度にも触れたい。総合大学音楽学科の学生には、ダブルメジャー生が十数名～数十名単位で存在する。ダブルメジャーとは、同じ学位のもとで二つの分野を専攻することである。たとえばカリフォルニア大学は、細胞生物学、修辞学、物理学、演劇、舞踊、政治科学、経済学、英語、経営学等とのダブルメジャーで音楽を学ぶ生徒がいる。当然かかる負荷は2倍(以上！)だが、アメリカでは意外に多いのだ。これとは別にダブル（デュアル）・ディグリーもあり、二つの異なる分野で二つの学位を取得することを意味する。

ではダブルメジャーの卒業生はどのような活躍をしているのか。

ハーバード大出身リサ・ウォンさんは、ボストン市内の医療機関従事者や大学医学部関係者で構成される、ロングウッド交響楽団会長の要職にいた。この交響楽団は当初小さなアンサンブルグループとして始まり、その後拡大して、今では音楽界と医療界をつなぐ役割を果たしている。「我々の存在意義は、音楽を演奏することによって公衆衛生の意識を喚起することです」とウォンさんは語っている。（ハーバード大ホームページより）

東京出身・スタンフォード大卒業生フジモト・アキコさんは、カリフォルニアの高校卒業後、スタンフォード大学で英語・音楽のダブルメジャーで学士号を取得、その後イーストマン音楽院で合唱指揮の修士号を取得し、ボストン大学オーケストラ指揮等を経て、現在ハーバード大学オーケストラの一つで指揮をしているそうだ。（スティーブ・サノ教授談）

あるペンシルベニア大卒業生は、ミシガン大学にて音楽学博士号を取得するかたわらビジネススクールにも通い、現在音楽ビジネスの専門知識をプロのオーケストラで生かしているそうだ。また演奏部門ディレクターのマイケル・ケトナー氏はイーストマン音楽院でトロンボーンを専攻したが、同時にビジネス、マネジメント、アントレプレナーシップに興味があり、現在はそれを音楽科目カリキュラム開発に生かしている。今年人文科学部エクステンション教育の一環で、「アーツ・アントレプレナーシップ」のコースを開講する予定である。（ケトナー氏談）

ダブルメジャーはこうしたマルチな能力が生まれる土壌となっている。その二刀流の才能をどう社会で生かしていくのかは別のテーマになるが、人間の才能を一つに限定せず、あらゆる方向に伸ばしていく考え方は、ある意味、社会に新たな突破口を生み出す可能性を秘めている。

(2) 海外とのつながり

～大学間・学部間の海外ネットワーク拡大

海外教育機関との提携や音楽祭遠征などによって国際文化交流を深めていくケースが増えている。海外遠征の事例として、スタンフォード大学は2008年に北京大学と連携した大規模な演奏旅行を行っている（300人以上参加）。イエール大学はプロジェクト単位で国際交流を進めており、英国王立音楽院との作曲科学生コラボレーション、オペラ科のミラノ公演、またイエール大学管弦楽団は2008年北京オリンピック開催直前に行われた《Musicathlon, The Conservatory Music Festival》に参加した（全世界から11音楽院が参加）。



広々としたキャンパスを持つシンガポール大学。イエール大学の「新設」が進んでいる。

また音楽院の例では、カーティス音楽院が毎年海外遠征《Curtis on Tour》を行っている。2012年は室内楽グループが中国、韓国、北米、欧州各都市で演奏旅行を行ったほか、カーティス管弦楽団が独ドレスデン音楽祭出演

を果たした。ドレスデンに同行していたロベルト・ディアズ学長は「今回ヨーロッパに初めて来た学生も多かったのですが、実際にドレスデンの街や建物を見て歩いたり、歴史に触れたりすることで、日々良い勉強になっていますね。たった一晩の演奏会でも変わるもので、翌日にはさらに音が良くなっていました。ツアーを行うことは若い学生にとって大変良い影響があると思います」と語っている。

海外教育機関とのパートナーシップ事例としては、イエール大学はシンガポール大学付属ヨーシントウ音楽院と、ピーボディ音楽院は英国王立音楽大学と、それぞれ連携した学位プログラムを提供している。（ちなみに音楽学科とは関係ないが、シンガポール大学内にはイエール大学が「丸ごと」新設される計画がある）

(3) 地域社会とのつながり

～より長期密着型の地域音楽活動へ

地域社会での音楽活動は、近年多くの大学・音楽院で積極的に行われている。その中で着目したいのは、かつての「アウトリーチ」という言葉から、「パートナーシップ」「エンゲージメント」といった言葉が頻繁に使われるようになったこと。これは単発の演奏行為ではなく、



2012年度ドレスデン音楽祭でオープニングを飾るカーティス管弦楽団。



右より、指揮者ロベルト・スバノ氏、音楽祭主宰のヤン・フォークラー氏（vc）、カーティス音楽院学長ロベルト・ディアス氏。

より密接かつ長期にわたる地域社会との関わりを示唆している。

スタンフォード大には《Music 4 all》という、小学校で音楽を教えるプログラムがある。また《Side by Side》は老人ホームや養護施設で音楽を演奏するプログラムだ。

イエール大学音楽学校では「コミュニティ・エンゲージメント・シンクタンク」という、音楽を通じた地域コミュニティとの関わり方を考えるプロジェクトがある。土曜日毎にセミナーが開かれ、ゲストスピーカーの講義後、グループディスカッションをするそう。自主活動を支援する助成金もある。

音楽院でも地域演奏活動を積極的に進めている。ジュリアード音楽院教員の一人はニューヨークフィルの「スクール・パートナーシッププロジェクト」一員として、小学校コンサートを実施している。（詳しくは後日公開予定）

カーティス音楽院でも地域社会での音楽活動が長く行われていたが、より計画的・長期的に地域密着型アーティスト育成に取り組むようになった。それが昨年秋から始まったCAP（Community Artists Program）である。詳しくは次項で述べたい。



ジュリアード音楽院

(4) 実社会とのつながり

～音楽の学びを、より効果的に社会で生かすために

大学での学びは、卒業後に実社会で生かされることが望ましい。もし在学中に実社会との接点を持てれば、その生かし方のヒントが得られ、さらに学びが修練されていくだろう。

たとえば全米音楽指導者協会では毎年、MTNA Collegiate Chapter 賞を授与している。Collegiate Chapter（大学分会）

とは3人以上で構成されるクラブのような小組織であるが、その上部組織にあたるMTNA支部やMTNA会員の活動に関わることで、未来の音楽指導者としてのリーダーシップスキルやマインドを習得していく。2011年度はウィスコンシン＝マディソン大学音楽学科の学生で構成されるCollegiate Chapterが同賞を受賞した。



2012年度MTNA Collegiate Chapter賞の受賞者たち。



カーティス音楽院在勤75年！多くの卒業生を送り出してきたエレノア・ソコロフ先生（左）。卒業生の動向も機関誌などでよく紹介される。写真は毎週水曜日のお茶会にて。

卒業生との繋がりが強い大学も多い。スタンフォード大学の卒業生センター（Alumni Center）では企業セミナーやシンポジウム等も行われる。シリコンバレーの中心部に位置する同大卒業生の中にはgoogleやyahoo!、ヒューレットパッカー



スタンフォード大学の卒業生センター



スタンフォード大学キャンパス内にコンサートホールが新設される予定。

ド創業者もあり、卒業生と接点を持ちながら、常にビジネス最前線に迫っていくという意気込みが感じられる。音楽学科も例外ではないだろう。同大はそもそも工学系に強い伝統をもち、音楽科学テクノロジー関連科目の履修生も多い。例えばコンピュータ音楽研究施設（CCRMA）初代館長は、ヤマハのシンセサイザー内臓機器の開発者である。音楽学科も含め、大学と実社会の距離が近いというのがスタンフォード大の印象である。それは教養科目カリキュラムにも現れている（→第2回目へ）。

ペンシルベニア大学は今年新設された夏季プログラム「アート・アントレプレナーシップ養成講座」にて、フィラデルフィア市内芸術センターや美術館等と組み、クリエイティブな問題解決策や新しいビジネスプランを考える機会を提案している。これは次項で詳しく述べたい。

なお実社会との接点という点では、特に音楽ビジネス系の学部・学科は一歩進んでいるようである。バークリー音楽大学ではインターンシップ制度が充実しており、例えば音楽ビジネス専攻学生は4年次に15週間のインターンシップが設けられている（週2回・140時間）。事務局スタッフがインターン候補企業を探して学生毎にセッティングするが、インターン先はニューヨークやロサンゼルス等もある。その他CDレーベルを作ったり、小さな会社を立ち上げたりといった学生の自発的な起業活動も推奨している。また授業には業界人のゲストスピーカーを呼び、21世紀音楽ビジネスモデルについて講義をしてもらうこともあるそうだ。さらに毎年音楽ビジネス国際会議を開催しているが、今年から同じくボストンにあるハーバード・ビジネススクールと提携した会合が開かれる。



バークリー音楽大学内にあるラジオステーションで学生が実況中。



バークリー音楽大学学生によるアクティビティは活発である。ちなみにキャンパスツアーは学生が案内する。

(5) グローバル社会とのつながり ～音楽を通して世界の現実と向き合う

MIT マサチューセッツ工科大学は、常に世界で起きている諸問題に対して強い関心と関わりを持つ。例えば東日本大震災後の復興支援のため、年間 6 万 9 千ドルの助成を受け、南三陸町にコミュニティセンターを設置することが決定した (MIT Japan initiatives Global Partnership)。その他にも世界の環境やエネルギー問題への取り組み、マラリア撲滅プロジェクト等、常に新しい世界を創出するための取り組みを積極的に進めている。この大学では、音楽がソフトパワーとしての力も発揮している。今年 3 月には「アラブの春」をテーマにしたコンサート&フォーラムが開催された（詳しくはこちらへ）。音楽は、対象に歩み寄り、理解を深める手段でもあるのだ。

グローバリズムの潮流は、カリキュラムの中にも反映されている。音楽民族学の広まりがそのひとつ。カリフォルニア大学は 1976 年～、ハーバード大学は 1993 年から音楽民族学の授業が始まっている。前者ではボニー・ウェイド教授が教授職に就いた 1976 年から音楽民族学の授業が開講されるようになり、現在は教授 4 名で学生数も増えているという。学習対象地域はヨーロッパ・アメリカ・日本・中国・インド・中東・中南米等に及ぶ。音楽に限らず、例えばアフリカンダンスの授業等も行われており、実際にパフォーマンスを通してそのリズムや身体の動きを学んでいく。ウェイド教授いわく、「ここには民族的なマジョリティはいません。中国や韓国だけでなく、カンボジア、ラオス、ベトナムなど東南アジア出身移民の子供たちも多いです。最近はインドやパキスタンなど南アジアからの移民が増えています、皆さん大変優秀ですね。私は現在『東アジア伝統音楽』の授業を担当しており、50～60 人の学生が受講しています。中国・韓国・日本は部分的に歴史を共有しながらも、楽器の発展やヨーロッパ文化の受容などに違いがあります。そういった事実を学ぶと、自分の国にそれほど興味がなかった（移民の）生徒でも、『こんなに豊かな文化があるとは知らなかった。ぜひ行ってみてみたい』と目覚めることがあるのですよ」。

スタンフォード大学では全学生必修科目の中にグローバルスタディが含まれ、留学生も多く、海外教育機関との提携も盛んである。2008 年には音楽学科生による北京演奏旅行を実施している。また 2006 年から 5 年間にわたって「未来のリーダー育成キャンペーン」が展開された



マサチューセッツ工科大学音楽学科のフレデリック・ハリス教授。アラブの春をテーマにした曲を委嘱し、今年 3 月コンサートとフォーラムを開いた。



カリフォルニア大ホールで行われるアフリカンダンスの授業。ステージで一斉に踊る、踊る！講師はガーナ人。



スタンフォード大学キャンパスにはロダンの作品が多く展示されている。何とも贅沢な芸術環境だ。

(総額 43 億円)。その主軸となる分野は「環境」「国際関係」「健康」「K-12 教育（幼稚園から高校卒業までの教育機関）」「芸術」である。芸術分野ではカントール芸術センターと、844 席の新しいコンサートホールがその象徴的存在であり、後者は 2013 年 1 月に完成予定だ。つまり、グローバル社会の未来には芸術が欠かせない、ということなのである。

III. 音楽業界を取り巻く新しい動き～未来の音楽家を育てる新たな試み

「アメリカの総合大学にはなぜ音楽学科があるのか」をテーマに、音楽学科が生まれた歴史的背景、音楽がリベラルアーツとしてどう学ばれているのか、パフォーマンスとリベラルアーツの歩み寄り、音楽を媒介とした大学と外部社会のつながり等について、これまで触れてきた。最終章は、未来の音楽家を育てるための新しいプロジェクトについてご紹介したい。



ペンシルベニア大学音楽学科の建物。

(1)アントレプレナーシップ・プログラム (Entrepreneurship Program / ペンシルベニア大学)

ペンシルベニア大学では今年 5 月より、アーツ・アントレプレナーシップのコースを初開講した。アントレプレナーシップとは「起業家精神」を意味する。このコースの目的は、音楽家としての能力をどう生かして社会に最大限の価値を生み出せるかを、創造的に考える講座である。開講期間は 12 週間（毎週火曜日 3 時間× 12 週）で、コース内容は (1) コンサルティング・ワーク (2) 個人プロジェクトで構成される。(1) はフィラデルフィア市内の芸術関連機関と連携し、問題に対する創造的な解決方法を編み出していく。(2) 個人プロジェクトは、ビジネス計画やキャリアプランを考案することを想定している。

時代は今、「リーダーシップ育成」から「アントレプレナーシップ育成」に変化しつつある。この言葉の定義について、同講座を担当するマイケル・ケトナー氏は次のように述べている。「アントレプレナーシップとは創造的に考えること。アイデアを生み出し、それを社会や世界に創造的に伝えること、またはそのスキルを指します。一方リーダーシップとは、そのアイデアを実行して事を成し遂げること。学生には両方の経験を積ませたいと思います。今多くの教育機関では『音楽業界はこうである。だからその中で生き延びるためにこうしましょう』と教えていますが、私は必ずしも今の状態である必要はないと思っています。音楽家として生計を立てていかななくてはならないという考えに固執しすぎると、『自分がこの楽器を弾いていることが誰のためになるのか』という考えが欠落してしまう可能性があります。音楽を演奏するだ

けでなく、その音楽で何ができるかを考えることが大事です。リベラルアーツ教育を通して、複数の分野から新しい可能性を見出していくことができるのではと考えています」。

こうしたリベラルアーツの考え方を踏まえ、人文科学部は音楽学科への支援を惜しまないそう。

(2) コミュニティ・アーティスト・プログラム (Community Artists Program/ カーティス音楽院)

地域コミュニティで演奏活動を行うことを通常「アウトリーチ」と呼んでいたが、近年アメリカでは「パートナーシップ」「コミュニティ・エンゲージメント」といった文言を使うことが多い。それは単発のコンサートではなく、地域社会とより長期的な関係を築いていくことを示唆している。カーティス音楽院では地域社会での音楽活動が長く行われていたが、より計画的にかつユニークな形で地域密着型アーティスト育成に取り組むようになった。それが昨年秋から始まったCAP (Community Artists Program) で、現在7名が参加している。



グローバルに活躍するアーティストを多数輩出するカーティス音楽院は、同時に地域密着型でもある。地元の支援者も多い。

1学期(秋)は主にプランニング、2学期(春)はその実践となる。週1回メンターとのミーティング、また各学期に3回ずつグループミーティングが行われ、お互いに意見交換したり、ゲストスピーカーに話してもらうそう。1月にはチェロ奏者ヨー・ヨー・マ氏をゲストとして招いたという。プロジェクトは演奏主体だが、単に演奏を披露するだけではない。例えば音楽祭で5日間にわたって地域住民に音楽を教えたり、親子一緒にピアノを教えたり、小学校で室内楽コンサートをするなど、学生が自分でプログラムを考案する。副学長ジョン・マンガン氏は、「これは"リレーションシップ・ビルディング"、つまり地域社会との関係構築がテーマです。自分が住んでいる地域に関わること、また地域の方々に若い音楽家の演奏を聴いて楽しんでもらうこと。どちらも重要だと思います。お互いにどれだけ成長したかも分かりますし。学生にとっては友人同士の付き合いから一歩抜け出し、社会と繋がる経験になりますね」と語る。

(3) 自主的な音楽活動に対する助成金 (スタンフォード大)

助成金の目的は自主的な研究活動を促すことにある。その最たる例がスタンフォード大学だろう。Google、yahoo!、ebay、Linked In、ヒューレットパッカードなど世界的企業の創業者を数多く輩出しているが、その起業家精神は大学時代に培われたといっても過言ではない。現

在キャンパス全体で五千を超える学外スポンサーによるプロジェクトが進行し、向こう 10 年間（2011-2021 年度）の予算は合計 12 億ドルに達する見込みである。昨年 1 年間だけでも学部生の研究活動に与えられた助成金・奨学金は 400 万ドルを計上したそうだ。また技術系の特許収入は 2010～11 年度で 6,680 万ドルを超え、新たに 101 の特許が申請された。こうした数字だけでも、キャンパス全体の士気の高さが伺える。



未来の学生たち？スタンフォード大には世界各国から見学者が続々訪れる。

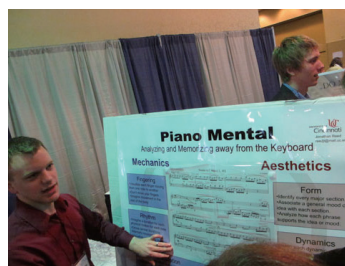
では音楽学科の活動にはどのような助成金が下りているのだろうか。たとえば、太鼓を専攻していたある卒業生は、夏休みに行われた小口大八氏の和太鼓プロジェクトに参加するために助成金を申請し、大学が全学負担したそうだ。またある声楽専攻の学生は、ザルツブルグ国際音楽アカデミーに参加するための助成金を申請、大学側は 2 か月分の渡航費・受講料など全学負担した（約 9000 ドル）。助成金プログラムによって異なるが、終了後はプレゼンテーションやリポート等を提出する場合が多い。こうした芸術関連助成金をマネジメントする SICA(The Stanford Institute for Creativity and the Arts) という機関もあるそうだ。学生にとっては夢を実現させるために自主的に動くことで金銭援助が得られるという、なんとも贅沢な環境である。

(4) 音楽教育研究の充実（全米各大学・大学院）

アメリカの大学院修士・博士課程では、音楽教育現場に密着した研究活動が盛んに行われている。2012 年 3 月に開催された MTNA 全米カンファレンスでは、その研究発表（ポスターセッション）の場が設けられた。研究内容は「レッスン時の iPad 活用について」「オケ中ピアニストの研究」「アンサンブル体験が学習に及ぼす好影響」「生徒の性格に合わせたレッスン計画と健全な師弟関係」等である。その中の一つ、オハイオ州立大学博士課程のマーガレット・ヤンさんは「グループピアノレッスンの正統評価について～演奏技能と姿勢の効果」について発表した。「ピアノ演奏技術の指導をグループレッスンに入れるべき」であるとの研究は過去に多くなされたが、どのように指導されるべきかについての研究がほとんどないことに触れ、効果的な指導方法とその効果について研究したものである。



マーガレット・ヤンさん (MTNA ポスターセッションにて)



MTNA National Conference でのポスターセッションの様子。

研究内容の概要をご紹介します。同大学音楽学科の学生 22 名を、まず 2 つのグループに分ける。コントロール組（10 名）はあらかじめ用意された指導内容に従うだけだが、実験組（12

名)にはより充実した指導プログラム、オブザーバーの立会い、実際のピアノ指導者によるレッスンビデオ鑑賞、他のメンバーへのピアノ指導、伴奏等が加わる。実験は6週間に渡って行われ、実験前後に5つのスキル(移調、和声、伴奏、読譜、歌いながら演奏)のテストを実施した。すると6週間後、実験組の方があらゆる点においてポジティブな反応を見せたそうである。例えばこのグループレッソンの目的と効果について両グループに尋ねたところ、コントロール組は「ピアノから多くの響きが同時に得られること」と答えるにとどまった。一方実験組は「音楽指導者にとってピアノは重要であること、セオリーの理解が進むこと、専攻楽器の練習にも役立つこと」と答えたそうである。



見学者から沢山の質問が寄せられる。

こうした大学における研究結果がポスターセッションで発表された。こうした調査研究を通じて音楽教育のあり方が客観的に見直され、より現場に即した形で取り入れられていくと期待されている。

音楽は数千年前の古代ギリシャ時代から人間社会とともにあり、人間の基礎力を高める教養(リベラルアーツ)としての役割もあった。アメリカではその考え方を受け継いだからこそ、音楽院だけでなく、一般の大学でも教えられているのだろう。音楽をより広いコンテキストで捉え直した時、音楽の接し方や学び方はどう広がるだろうか。われわれはそれをどう開拓していけるだろうか。アメリカの大学事例を通じて、考えるきっかけになれば幸いである。現在活躍中の日本人・日系アーティストの中にも、色々なバックグラウンドを持つ方々がいる。アメリカ留学で音楽と同時にリベラルアーツを学んだ方、一般大学卒業後に音楽家になった方、現在アメリカの大学音楽学科で教えている方など、様々である(近日中にインタビューをご紹介予定)。この多様さこそが、音楽そのもの、と言えるのかもしれない。

著者

菅野 恵理子

すがのえりこ◎上智大学外国語学部卒業。在学中に英ランカスター大学へ交換留学、社会学を学ぶ。一般社団法人全日本ピアノ指導者協会にて編集・広報等を歴任。2007年に渡仏し「子どもの可能性を広げるアート教育・フランス編」を1年間連載。現在音楽ジャーナリストとして、国際コンクールや音楽祭取材、海外音楽教育のレポート、アーティストインタビューなどを手がける。ピアノは幼少・学生時代にグレッグ・マーティン、根津栄子両氏に師事。

<http://www.erikosugano.com>

アメリカの大学にはなぜ音楽学科があるのか？

著 者 菅野恵理子

web 公開 2012 年 6 月 8 日

発 行 日 2013 年 11 月 7 日

発 行 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会

〒170-8458 東京都豊島区巣鴨 1-15-1

TEL : 03-3944-1583

FAX : 03-3944-8838

<http://www.piano.or.jp/report/>

